

った際、その男の子が『これ(傷)は友達になった証拠。僕だけや!』と得意げに話している姿を見て、親として非常に胸が熱くなった。というエピソードは、聴衆(多くが若い保護者の方々でした)の涙を誘っていました。もちろん、先生の介入もあっての一言だったのですが、このことから学校の考え方や先生の接し方により、障がいの有無に関わらず子供たちは変わっていく…これがインクルーシブ教育の目指すところである。と熱く語っておられました。実際にはハードルが高く、デリケートな子供たちには十分な配慮が必要なインクルーシブ教育ですが、多様なニーズを持つすべての子供たちを対象に、最善の利益を与えられるよう、私たち大人も心しなければならぬと感じました。

【放課後デイサービスを中心とした児童サービスの在り方】という講演では、上智大学の犬塚教授が、重度の知的障がいがあるご子息の成長とともに感じた教育と福祉の連携について、近年増加傾向にある放課後デイサービスの新たな課題を中心に話されました。

この3年で事業所数が約4倍にもなった放課後デイサービスは、顧客確保の観点から徐々に守備範囲の広がりを見せ、送迎はもちろんのこと、思春期支援や不登校対策、受験準備等々の看板を掲げ、週7日受け入れや早朝・深夜対応…と本分を逸脱しているともとれる運営をするところが出始めている。との報告がありました。犬塚教授は、この現状は、ややもすると親力(おやりょく)の低下を招き、さらには公費を使っているのにネグレクトに値する!と、あえて過激な表現を用い、警鐘を鳴らしておられました。ただ、このような危機的状況を救う手だてはあるとし、それが相談支援事業であると期待を込めて話してもおられました。放課後デイサービスの個別支援計画と学校の個別教育支援計画を共有し、相互の連携を図りながら本人のニーズを盛り込むサービス等利用計画を作成することは、一貫した教育的支援を受けるためには非常に重要であるとのことでした。

《そだつ》のコースでは、この他にも講演やシンポジウムがいくつもあり、とても熱気を帯びた分科会でした。これまで、私は成人期の方への支援を中心に行ってきたこともあり、学齢期にかかる問題は縁遠い事柄でしたが、今回の数々の提言・報告等を伺うことができ、現在、相談支援に携る中で切れ目のない支援を行うためには教育と福祉の連携がいかに重要かを感じることができました。今回の全国大会で学んだ事を

今後の業務に役立てられるよう、今一度、資料を読み返し復習に励みたいと思います。

### 分科会Bコース

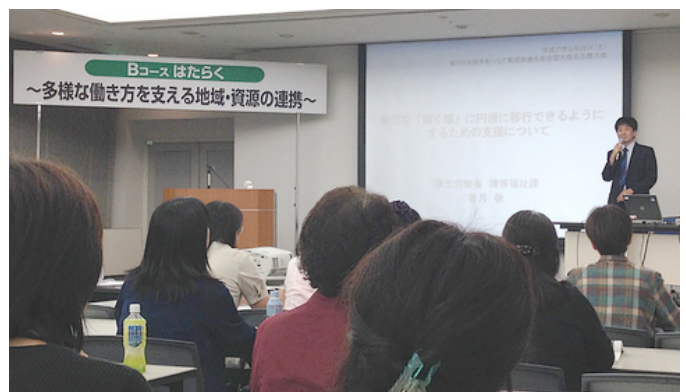
【はたらく】に参加して

港第二育成園 足立 智宣

分科会のBコースでは「はたらく」ということで、多様な働き方を支える地域・資源というテーマで、3人の方による講演、実践報告、シンポジウムが行われました。

講演の1人目は厚生労働省 就労支援専門員 香月敬氏より、多様な「働く場」に円滑に移行できるようにする為の支援についての講演がありました。

多様な働く現状ということで、障がい者の就労形態や就労移行支援事業からの一般就労への移行率や就労継続支援A型と就労継続支援B型についての説明がある。就労系の福祉サービスからの一般就労については年々就職者数が増えている一方で、移行率が0%の事業所も3割強あります。また、就労継続支援A型と就労継続支援B型の事業所の数は増えていても一般企業への就職が8割ほど出ていないというのが現状であるようです。就労アセスメントは、本来、就労経験はあるが、雇用が困難になった方などを対象にしていたが、27年度以降は特別支援学校卒業後すぐに就労継続支援B型事業所の利用を希望される方の利用が増えていきます。香月氏はアセスメント実習を支援学校在学中に行い、就労継続支援B型事業所に行く為に使うのではなく、就労面の情報の把握の為に使ってほしいという事を話されていました。



講演の2人目は石狩市相談支援センター ぷろっぷ大澤 隆則氏より相談支援体制のあり方についての講演がありました。

相談とは、一人でやるには自信や根拠がない場合に行うもので、行動の根拠を作ることである。相談の道筋は、親子関係から友達に広がっていくもので、話を聞いて教えてくれる存在が大切であるが、大学や専門